

消化管内視鏡診断学大系 第7巻

胃 ⑤進行胃癌・その他の悪性腫瘍

編集責任者 常岡 健二 日本医科大学教授

早期胃がん検診協会会長

近藤 台五郎

編集責任者常岡健二教授も序文で述べられているように、進行胃癌の内視鏡診断学は現在トピックスからやや脱落しているように思われます。しかし、このことは日常診断にたずさわっているわれわれにとってはまことに困った傾向といわざるを得ません。

胃癌の内視鏡診断面に関してアトラクティブなのは、その早期発見、初期像の解析にあるのはいうまでもないことですが、それだからといって進行胃癌のそれを軽視して良いというわけにはいきません。

現実の問題としては、相変らず進行胃癌症例が、その数において早期胃癌に勝るのは疑うべからざることだと思います。われわれは進行胃癌を正確に診断する目を養う必要性を軽視するわけにはゆきません。

シンドラー教授の活躍しておられた時代にディスカッションされた潰瘍そのもの（辺縁を含めて）の内視鏡形態学上の良性・悪性鑑別、あるいは癌浸潤の範囲決定などについての議論は、現代のわれわれの知識からみれば、誤謬と独断とを多分に混じったものといわざるを得ませんが、しかし、それにしてもそれらの議論の根底をなしている内視鏡の所見を脳裏にきざんでおくことは、必要欠くべからざることと思います。

平生からそのような知識を基とした経験を積んでいけば、進行胃癌に

おける生検フォルス・ネガティブ例も格段に少なくなるわけです。

常岡教授は、改めて申すまでもなく、数十年にわたってこの方面に没頭され、深い考察をなし続けておられる方ですし、各執筆者も、またいず

れもこの方面の経験においては一流の方々ばかりです。本書の内容が充実していることも自明の結果です。

われわれは、本書を熟読して、進行胃癌の“見逃し”という一般には最も初歩的な失敗と思われる、しかも現実には決して少なくない失敗を可及的に少なくするように努めなければならぬと思います。

内視鏡診断をこれから始めようと考えている方にはもちろん、それに熟練しておられる方々にとっても、本書は座右に必携の良書です。

B 5 / 頁 182 / 図 136 / 写真 57 / 原色図 184 / 1977 / ¥ 20,000 / 〒 300 / 医学書院刊

図解 高カロリー輸液

—安全な中心静脈栄養法—

監修 佐藤 博 千葉大学教授
執筆 小越 章平 千葉大学第2外科
碓井 貞仁 千葉大学第2外科

神戸大学教授

光 野 孝 雄

最近食道癌手術や胃全摘で縫合不全を起こしてもほとんど死亡しないようになったが、これら外科手術成績の向上に大きく貢献しているのは非経腸完全栄養法 Total parenteral nutrition (TPN) である。これが Dudrick らによって最初に発表されたのは1968年であるが、その後本邦でも行なわれるようになり、かなり普及した。しかし高張糖液による血管刺激を避けるためにチューブを中心静脈に入れる繁雑さがあつたり、長期間挿入による血液感染、或は注入輸液の組成など種々厄介な問題を含んでおり、良法だからといって誰でもが簡単にできるというものではない。実際に本邦でこの TPN が常

時できる態勢にあり、またそれをより安全に、より完全なものにしようと努力研究しているのは主として大学病院の十数施設に過ぎない。しかもはや本法を常用しなければ正しい医療はできない時代になったといっても過言でなからう。

この時に当って今回、小越、碓井両氏によって「図解 高カロリー輸液—安全な中心静脈栄養法」が発行されたことは時宜を得たものとして誠に喜ばしいことである。というのともかく複雑だと思いこんで実施を億劫がりがちな TPN 法を極めて平易に説明し、親しみ易い小冊子にまとめあげて書かれているからである。本書の特徴は、本文 136 頁に対

して図89, 表50というように図表が多いことで, この種の書物に多い無味乾燥な字の羅列でなく図表が多いので, 一目して理解が容易である。まずもって, 読んでいて肩がこらずいつの間にか自分もやってみようかという気を起こさせる書物といってもよからう。

本書は高カロリー輸液—その必要性と適応より始まり, 高カロリー輸液における代謝と侵襲下の生体反応, 高カロリー輸液法の基本手技, 高カロリー輸液剤の種類と組み立て方, 高カロリー輸液に必要な検査と意義, という総論的記述の後, 食道疾患, 胃疾患, 腸疾患, 肝胆道疾患, 膵疾患のそれぞれの場合の TPN の実際を, 症例を挙げながら説明し, さらに特殊病態として, 心不全, 糖尿病, 腎不全などの場合の TPN, 制癌剤との併用さらには TPN の合併症とその対策という順序で TPN のすべてを網羅して述べてある。

標準外科学

編集責任者

武 藤 輝 一 新潟大学教授

相 馬 智 杏林大学教授

関西医科大学教授

山 本 政 勝

外科学に関する教科書は国の内外をとわず優秀な教科書が数多く刊行されているが, 既刊の教科書はともすれば全般的にそつなくまとめられているために, 学生にとってはどこが重要であるのかの判断は必ずしも容易とはいえなかった。

一方, 近年における外科学の進歩には各論的知見の向上もさることながら, 麻酔, 輸液, 感染, 治療など

著者はかつて千葉大生化学三浦教授やペンシルバニア大学で学んだ生化学の知識を臨床によく応用, 取り入れているものの1人といえ, TPN 一辺倒の人でなく, 経腸成分栄養法 elemental diet の研究も行なっているが, これと TPN との長短, 比較が随所に出てきて, 読む人をして飽かせない。

以上のように TPN は, 外科では現在欠かすことができない必要なものになってきたが, これは外科に限らず, 小児科, 内科をはじめすべての科にも応用されて, 有用なものである。その普及が大いに期待される。TPN は近代医学の新武器とでもいうべきものである。外科医といわず栄養障害の治療に携わる医師は必ず本書を一読し TPN を実施されることを期待する次第である。

B 5 / 頁 156 / 図 89 / 写真 12 / 1976 /

¥ 3,500 / 円 160 / 医学書院刊

といった患者の管理面の進歩に負うところもまた大であり, このような意味合いからも総論的知識の重要性もなおざりにすることはできない。とくに最近では, 形態学のみを偏重してきた従来の外科学から, 生理や生化学的基盤に立脚した機能面を加味して総合的に考究しようとする外科学へと変貌しつつあることも否めない傾向であろう。

今回このような主旨に沿い「標準外科学」が発刊されたことは誠に同慶の至りである。しかも執筆者はいずれも外科学の教育と診療の第一線で活躍されている新進気鋭の方々である。本書はその名の示す通り, 今日の医学教育に即応した標準的教科書であって, 学生諸君には判り易く, しかもどこが重要であるかについても一見して理解できるように配慮されている点で, 従来のものとは異った新しい感覚の教科書といえよう。

一方, 外科学も医学の進歩発展にともなって各専門分野へと細分化されつつあり, したがってこれらに関する情報も膨大なものとなりつつある。本書ではこのような膨大な情報の中から, 外科学の原則を正確かつ重点的に把握できるように配慮してあることもその特色の1つといえよう。たとえば本書では最近の生理や生化学の新しい情報を取り入れて, 基礎医学と外科学とを関連づけながら解説を行っており, この点でも学生諸君の外科学に対する理解を一層容易ならしめるであろう。また過去の時代には動物実験の域を一步も脱しなかった臓器移植, 人工臓器に関しても, また, 難解なショックについても, その基本的な考え方から将来の展望までもり込んで専門的に解説してある点も, 従来の教科書にはあまりみられなかった特色の1つであろう。

もう1つの特色は, 本書では総論から各論までがコンパクトな1冊の本にまとめあげられていることで, これは持ち運びにもよい。

以上のような理由で本書は学生はもとより研修医, 実地医家, 教育者にも是非一読をおすすめしたい。

B 5 / 頁 544 / 図 417 / ¥ 6,500 / 円 300 /

医学書院刊